

梶浦善次先生：その人と業績

著者	古瀬 卓男
雑誌名	北海道女子短期大学研究紀要
巻	22
ページ	1-8
発行年	1987
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001768/

梶 浦 善 次 先 生

— そ の 人 と 業 績 —

学長 古 瀬 卓 男

先生は、明治38年8月30日北海道に生まれ、大正9年3月北海道留萌町留萌尋常高等小学校高等科卒業と同時に、留萌町礼受尋常小学校代用教員として14歳から教壇に立ち、ただちに準訓導の資格を取って子弟の教育にあたり、以後教職を離れることなく札幌師範学校、東京高等師範学校、東京文理科大学に学ばれた。

以来、68年の長きにわたって一貫して教職にあり、その足跡は幼稚園より大学に至る全ての学校に及び、幼稚園長、小学校長、中学校長、高等学校長、大学教授、大学学長として、終始教育のために粉骨砕身の努力を重ね、常に北海道教育界の中心的存在として数多くの功績を残し、国際的視野に立つ卓越した識見によって教育界はもとより社会的にも大きく貢献された。その主たるものを列挙し、はしがきに代えたいと思う。

(イ) 大正14年3月北海道札幌師範学校を卒業、同年4月北海道小樽市手宮尋常小学校訓導として奉職し、在職期間は1年間であったが、貧困家庭児童の学級経営に努力し、短時間に学級の空気を刷新する成果をあげて注目され、研究授業その他校内の指導的役割を果たした。しかし大正15年4月、向学心を断ち切れず東京高等師範学校文科第三部に学び、昭和5年3月卒業とともに北海道庁立札幌第一中学校教諭に任ぜられ、さらに昭和13年3月北海道庁立小樽中学校教諭英語科主任に任ぜられた。

その間、英語教育の新しい教授法を実践して、中学校英語教育に尽力し、その業績は高く評価され、昭和25年9月には、全道中学校英語教育研究会会長、昭和28年10月、全道英語教育研究会副会長におされ、北海道における中学校、高等学校、大学の英語教育に常に指導的立場で尽力された。

(ロ) 昭和17年4月向学心止みがたく、東京文理科大学に哲学を学び、昭和19年9月同校を卒業、同年9月北海道第一師範学校嘱託講師、同年12月北海道第一師範学校教授に任ぜられた。

同年7月生徒主事を兼任、昭和21年9月北海道第一師範学校厚生課長、昭和22年4月北海道第一師範学校教務課長兼務を命ぜられ、昭和24年北海道学芸大学北海道第一師範学校教授に、昭和24年6月北海道学芸大学助教授に補され、併せて北海道学芸大学北海道第一師範学校附属中学校、同小学校主事を命ぜられた。

昭和26年4月北海道学芸大学附属札幌中学校長及び附属札幌小学校長を併任、昭和29年8月北海道学芸大教授に昇任、昭和33年3月北海道札幌旭丘高等学校長に就任のため退職された。

この間先生は教育学の教官として教育学の研究と、学生の教育に鋭意努められた外、生徒

主事として師範学校長を補佐し、終戦直後、北海道第一師範学校の施設がアメリカ軍の占領による混乱状態を回避するため、アメリカ軍と適切に交渉するなど、師範教育の機能維持に尽力された。

また、新学制発足に伴い、北海道第一師範学校から北海道学芸大学への転換期にあたり、既存の道内四師範学校のあり方をふまえて、いかなる新制大学へ昇格させ、どのような姿の教員養成大学を創設するかについて、教務課長として師範学校長を助け、日夜苦心を重ねて今日の北海道教育大学の礎石を築くことに献身された。

更に、昭和30年には北海道学芸大学の管理機関である代議員として、旧師範学校当時の施設の整備拡充、教授陣容の強化充実に努め、また教育学科の主任教授として、教育の実践、教育課程の編成、教育内容の充実に全力を傾注し、また北海道学芸大学僻地教育研究所理事として僻地教育の理論的指導に大きく貢献された。

先生は特に、9年の長きにわたって附属札幌中学校、同小学校の主事及び校長を兼務し、戦後の新教育における小・中学校教育のモデル学校としての機能を十分に果たし、よって新教育の指針を教育実践を通して具体的に示して、北海道のみならず日本の教育の発展に寄与すると共に、全国附属学校の改善充実に努力を続けられた。当時は、新教育が発足して間もない創成期であり、諸説乱立の混迷期でもあったが、それだけに新しい民主的市民育成を念う教育の確立が急務とされた時期であって、附属小・中学校はその研究の先端を担っていた。

先生は、教育を常に人間と社会と歴史という視点から全体的、総合的に考究し、それを哲学的論理のもとに緻密に構築するという学問的態度によって、教育哲学の確立に鋭意研究を続けられ、数多くの優れた成果を発表して教育学の前進に貢献されたが、その面から附属学校教官を導き、その適切な指導のもとに、附属学校は一丸となって新しい教育課程の編成に取り組み、その成果は昭和24年「附属札幌小学校の教育課程」として刊行された。その後も継続実践研究が公開されて、道内の学校はもとより全国的に各学校の注目する処となり、教育の一つの指針を与えられた功績は大きく評価されなければならない。

一方、附属札幌中学校は誕生後間もなく、新制中学校の基盤整備確立への時代でもあったが、先生は、献身これに没頭し、着々と施設設備の充実に努め今日の基盤をつくられた。

このような教育研究・学級経営は単に附属学校内にとどまらず、先生は、大学学部と附属学校間の研究交流にも努め、理論と実践の相俟った研究の道を開き、そのような雰囲気の中で大学学生の教育実習の指導に意を用い、教師養成に貢献された。

この間、昭和29年にはアメリカ国務省の人事交換計画によってアメリカ政府に招聘され、教員養成制度を主体に小・中学校における普通教育に関して調査研究を行っておられる。

い) 昭和25年からは、3ヶ年にわたって北海道教育委員会による「北海道教育課程協議会」の常任委員として、北海道の教育目標策定のための中心メンバーとして活躍するとともに、附属学校での体験をもとに、北海道教育課程編成にあたり、その基底作成に中心的役割を果たされた。当時、新しい教科として誕生した社会科教育については、暗中模索の状況にあった

が、昭和24年、いちはやく北海道社会科教育研究会を設立し、委員長として30年間研究と指導にあたり、その累積した業績は、今なお後継者によって継承発展を続けている。

- (二) 昭和33年4月北海道札幌旭丘高等学校の創立に伴い懇望されて、その初代校長に就任し、学校建築、施設設備については、広い視野と緻密な計画によって従来の高校の水準を一新する充実した学校をつくり、創意に富んだ学校経営、精緻な生徒指導と相俟って、短期間に全国的にも有数な学校に育てあげ、更に昭和37年には同校とアメリカオレゴン州ポートランド市ジェファーソン高校との間で姉妹校提携の盟約をし、率先して提携活動を盛り立てて国際理解の教育に対し多大なる貢献をするなど、札幌市のみならず北海道における高校教育の発展に努力された。

その間、北海道市町村立高等学校長会会長、全国都市立高等学校長会常任理事、全国高等学校長協会理事として活躍し、更に北海道高等学校長協会常任理事として勤評対策委員、生徒指導部委員、教育課程専門委員、教育制度委員として常に、調査研究と指導対策に責任者として、また、札幌市立高等学校長会の代表として指導的立場で北海道・札幌市の高等学校経営に重要な役割を果たされた。

一方、教育向上のためには、教師の研修こそ必須のものとして、昭和37年「北海道高等学校教育研究会」の設立を提唱し、全道的に会員六千有余名、高校全教科部会を有する全国稀有の大きな組織造りに成功し、その会長として毎年研究大会を開催し、研究紀要を発刊して、本道高校教育の発展に寄与し、現在もお顧問として指導に力を尽くしておられる。

昭和38年リオデジャネイロで開催された「世界教育者団体総連合会」の第11回総会に、日本代表として出席、同時に欧米諸国の教育事情、学校施設・設備の視察を兼ねて各国を歴訪し、この間北海道教育委員会からの依頼により、欧米諸国の教育課程、教育条件、教員の勤務条件などの調査研究にあたり、これらが北海道の教育界に与えた成果は大きく評価されている。

- (ホ) 昭和41年4月北海道札幌旭丘高等学校長を退職すると同時に私立北星学園大学文学部教授に就任、教育学担当教授として学生の教育にあたり、大学教育界に復帰された。時あたかも大学紛争期の最中であり、全国いづれの大学においても日常の教授活動すら困難を極めた時代であった。北星学園大学もその例外ではなかったが、昭和42年4月より2ヶ年間、学生部長として直接紛争解決の任にあたられた。

すぐれた識見、高潔な人格、豊かな経験は、学生はもとより教職員の尊敬、信頼をあつめ、山積する諸問題を次々に解決し、北星学園大学安定発展の基盤を確立するとともに、他大学にも学校運営の指針を与えられた。

- (ヘ) 昭和45年4月創設間もない私立静修短期大学長に就任、同時に学校法人静修学園評議員・理事となり昭和46年12月退職するまで1年9ヶ月間の短期間ではあったが、大学運営の任にあたられた。

- (ト) 昭和47年1月こわれて北海道女子短期大学の教授となり、教育学、教育原理、教育方法論

などを講じて学生の教育にあたられた。同年7月末には、学長代理に任ぜられ、田所哲太郎学長をよく補佐して短期大学運営の重責を果たし、昭和49年6月学校法人浅井学園評議員・理事に就任、昭和50年10月には学長に就任、短期大学運営の直接責任者として、大学運営体制の改善のための諸規程の整備、教育内容の向上のための教育課程の改善、教官の教育・研究条件の整備、施設設備の整備充実など困難な諸問題の解決にあたり、着々と成果を上げられた。

(チ) その他、昭和29年財団法人日本教育公務員弘済会支部北海道教育公務員弘済会が設立されるや理事となり、47年より理事長、60年には本部会計監査就任、教職員の福祉並びに教育研究の向上に尽力。さらに北海道労働教育審議会学識経験委員、北海道青少年問題協議会委員、「教育新潮」編集委員長、「北海タイムス」編集審議委員、財団法人南部忠平記念財団監事、更に青少年国際交流推進のための北海道メークフレンド協会会長等巾広い活動によって社会教育全般にわたる顕著な功績をあげられた。

以上のように先生は長年にわたり情熱をもって教育にあたられ、その人格は極めて高潔で温容にあふれ、責任感が強く、多くの教育者、学生から大なる尊敬と信頼を得ておられる。

また、大学の管理運営においても、すぐれた才覚を示し、よくその重責を果たし、北海道の教育振興に寄与された功績は極めて高く評価されている。

更に、教育学に関する識見は極めて広く、その論説は中正であって、常に実践者に対して指導的役割を充分果たし、研究者として学術の振興に寄与し、また、教員養成を通じて教育界の発展に貢献された。

以上の功績により昭和55年4月勲三等瑞宝章叙勲、昭和58年11月北海道文化賞受賞の栄に輝いている。

梶浦先生年譜

官 職 名	在 職 期 間
北海道留萌町礼受尋常小学校代用教員	自大 9 年 4 月 1 日 至 9 7 30
北海道留萌町礼受尋常小学校準訓導	自 9 7 31 至 10 3 31
小樽市手宮尋常小学校訓導	自 14 3 23 至 15 3 31
北海道庁立札幌第一中学校教諭	自昭 5 3 31 至 13 3 30
北海道庁立小樽中学校教授	自 13 3 31 至 17 3 30
北海道第一師範学校嘱託講師	自 19 9 30 至 19 12 25
北海道第一師範学校教授	自 19 12 26 至 24 6 30
同生徒主事	自 20 7 11 至 21 2 12
北海道学芸大学 北海道第一師範学校教授	自 24 5 31 至 26 3 31
同 附属小学校主事	自 24 6 30
同 附属中学校主事	至 26 3 31
北海道学芸大学助教授	自 24 6 30 至 29 7 31
同 附属札幌中学校長及び	自 26 4 1
同 附属札幌小学校長	至 33 3 31
北海道学芸大学教授	自 29 8 1 至 33 3 31
北海道札幌旭丘高等学校長	自 33 4 1 至 41 3 31
北星大学文学部教授	自 41 4 1 至 45 3 31
同大 学生部長	自 42 4 1 至 44 3 31
静修短期大学 学長兼教授兼附属幼稚園主事	自 45 4 1 至 46 12 31
北海道女子短期大学教授	自 47 1 1 至 62 9 30
(兼) 大麻幼稚園長	自 47 4 1 至 49 3 31
北海道浅井学園評議員・理事	自 47 4 1 至 現在
北海道女子短期大学学長代理	自 47 7 31 至 50 9 30
(学) 浅井学園評議員・理事	自 49 6 10 至 62 9 30

北海道女子短期大学学長兼教授	自	50	10	1
	至	62	9	30
勲三等瑞宝章叙勲		55.	4	29
北海道文化賞受賞		58.	11	2

梶浦善次先生著書論文一覧

著書

- 社会科教育の当面せる諸問題（昭和27. 8, 北海道教育図書刊行会）
 社会科教育の実践（昭和32. 8, 教育新潮社）
 北海道教育の未来像（昭和50. 11, 教育新潮社）
 モスクワの赤い月（昭和54. 3, 正文舎）
 教育の真実を求めて（昭和55. 6, 北海タイムス社）
 北海道開発功労賞に輝く人々—浅井淑子先生の業績—（昭和56. 3, 北海道）
 新戸部稲造（新渡部稲造と中等教育）（昭和60. 9, さっぽろ文庫）
 21世紀と教育（昭和61. 3, 世界平和教授アカデミー北海道支局編）
 教育の真実をみつめて（昭和58. 7, 北海タイムス社）
 戦後教育の問題点—教育改革によせて（昭和62. 3, 北海道, 札幌教育振興会）

論文

- 校長の望ましい在り方（昭和25. 6, 教育新潮）
 世界社会における世界史（昭和25. 6, 教育新潮）
 戦後におけるフランス教育改革の動向（昭和25. 6, 教育新潮）
 教師の一般教養（昭和25. 7, 教育新潮）
 学習指導（昭和25. 11, 教育新潮）
 ドイツにおける教育改革（昭和26. 2, 教育新潮）
 ソビエト衛生国の教育事情（昭和26. 4, 教育新潮）
 アメリカの子どもとラジオ・映画・漫画・テレビ（昭和27. 2, 教育新潮）
 学習指導と国際理解（昭和27. 2, 教育新潮）
 社会科における国際理解のプログラム（昭和27. 9, 社会科教育の諸問題）
 危機における教育哲学戦後におけるアメリカの教育哲学（昭和28. 1, 教育新潮）
 教育課題としての平和（昭和28. 3, 教育新潮）
 平和のための教師の任務（昭和28. 5, 教育新潮）
 教師の主体制確立の倫理と論理（昭和28. 10, 北海道教育評論）

- アメリカの学校 (昭和29. 6, 教育新潮)
- アクション・リサーチ (昭和29. 11 教育新潮)
- 教員養成大学の教育課程 (昭和30. 3, 教育新潮)
- 歴史教育の倫理的意義 (昭和31. 6, 教育新潮)
- 歴史教育の倫理的意義 (昭和31. 6, 教育新潮)
- 教員養成制度の問題 (昭和32. 8, 教育新潮)
- 社会科の生活 (昭和32. 9, 社会科教育の実践)
- 社会科教育の現段階 (昭和32. 9, 教育新潮)
- 教育課程改訂の動向 (昭和32. 12, 教育新潮)
- 教育の中立的立場とは何か 勤務評定制度に関連して (昭和32. 2, 教育新潮)
- 道徳の歴史的基底 (昭和33. 5, 教育新潮第100号)
- 北海道教育の展望 (昭和33. 6, 教育新潮)
- 教育学の在り方 (昭和34. 1, 教育新潮)
- 二重権力下における教育—教育の混乱の本質 (昭和34. 12, 教育新潮)
- 歴史教育は客観的でありうるか (昭和35. 10, 旭丘高校研究紀要第1号)
- 学校経営における校長・教頭・教諭 (昭和36. 3, 教育新潮)
- 高校生の政治活動 (昭和36. 4, 教育新潮)
- 道徳教育前進のために (昭和36. 5, 教育新潮)
- 教育の理想と教師の立場 (昭和37. 1, 教育新潮)
- アメリカの教員養成制度 (昭和37. 1, 教育新潮)
- 教育実習の問題性 (昭和38. 12, 教育新潮)
- 学力はどのようにしてつけられるか (昭和39. 2, 教育新潮)
- Th. ブラメルドの人間学的教育哲学 (昭和40. 10, 旭丘高校研究紀要第6号)
- 開拓精神論 (昭和41. 6, 教育新潮第200号記念号)
- ブラジルの教育 (昭和42. 6, 北海道自治)
- 未来社会に対応する社会科教育 (昭和42. 7, 教育新潮)
- 平和論の系譜—カントを中心に (昭和43. 7—9, 教育新潮第200号記念号)
- 学業不振児の指導 (昭和44. 6, 教育新潮)
- 大学教育の歴史的展望と現在の課題 (昭和44. 12, 教育新潮)
- Th. ブラメルドの「未来中心の教育」について (昭和46. 12, 札幌静修短大紀要第1号)
- Hegel における教育思想—教育の一般的概念 (昭和47. 3, 札幌静修短大紀要第2号)
- 学校と家庭—教育の変貌と両者の関係 (昭和49. 9, 北海道私学研究紀要)
- Hegel における教育思想—教育の社会的基礎 (昭和51. 12, 北海道女子短大研究紀要第9号)

学校教育の役割——家庭教育との関連を求めて——（昭和51，北海道私学教育研究協会研究紀要，第39号）

なぜ研究団体は二つか(1)，(2)ー社会科の場合ー（昭和58．9，北海道教育の窓）

「教育振興」論説，昭和60年

複眼的思考，1月号

自愛と他愛は同心円か，2月号

日教組の〈カクレ教育〉，3月号

教育改革の論理，6月号

教育臨調の第1次答申案をよんで，7月号

教師世界の閉鎖性，8月号

上杉鷹山再見ー道德教育の反省ー，10月号

中国の印象ー自然，人間そして教育ー，11月号

歴史の真実ー南京大虐殺記念館を見るー，12月号

カントにおける道德性の観念ー道德性の観念ー道德形而上原論を辿ってー（昭和61．10，北海道倫理哲学研究会，知慧（SOPHIA），第1号，1～9ページ）

「教育振興」論説，北海道札幌教育振興会，昭和61年

いじめ問題をめぐる動向，1月号

いじめ問題ー日弁連の「学校生活と子どもの人権」ー，2月号

いじめ問題ー法学的思考と教育学的思考ー，3月号

家永教科書裁判の判決，4月号

「生活科」の新設ー国語教育を強化せよー，6月号

原書房高校「日本史」をめぐる動向，7月号

主任制問題について（昭和61．2，「教育振興」124号，北海道札幌教育振興会）

教育方法の底にあるもの（昭和62．6，北海道教育実践研究会，教育実践叢書111所収，北海道教育評論社）

続，主任制問題（上）（昭和62．7，教育振興129号）

〃 〃 （中の一）（昭和62．9，〃 131号）

〃 〃 （中の二）（昭和62．9，〃 132号）

カントにおける道德性の概念ー道德形而上学原論を辿って(2)（昭和62．12，「知慧」第2号，北海道倫理哲学研究会）

翻訳

ヘーゲルの悲劇思想（昭和59．12，北海道女子短大紀要18号27～45ページ）